過去の地震災害の視覚資料化－1945 年三河地震を絵でのこす

Development of the Visualization Method Extracted the Survivors' Knowledge Learned through their Experiences in Disasters

林 能成[1]; 木村 玲欧[1]
Yoshinari Hayashi[1]; Reo Kimura[1]

[1] 名大・災害対策室
[1] Disaster Management Office, Nagoya Univ.

http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/~taisaku/

災害を絵画化する試みは、すでに近世から「災害絵図」というかたちで存在している。北原(2003)は、災害絵図を製作者・対象・目的の違いによって、1)災害実情把握(諸藩が御用絵師などを使って災害の地変を描かせ、災害の実態を捉えようとしたもの)、2)被災報告(村役人などが自村の被害を報告する、あるいは自己の体験を後世に伝えるために記録化しあるいは描写したもの)、3)伝聞・体験の記録化と継承(個人の見聞記録を知人や親戚自家の後裔に伝えたもの), 4)情報伝播・利益獲得(災害を絵図やものがたりに仕立てたり、かわら版などの木版印刷にして、書物問屋・紙双紙屋あるいは街角で読み売るなど、大量生産・大量消費用に作られたもの)、の 4 点に分類している。

明治期に入り、写真技術が急速に広まるにつれて、災害を視覚的に伝える資料は、災害絵図から建物などの被害写真へと変わっていった。明治から大正期の代表的な被害地震である 1891 年濃尾地震や 1923 年関東大震災では、震災の写真が多数残されており、これらは災害の実態を知らせる上で大変貴重な資料となっている。しかし、本研究で対象としている 1944 年東南海地震と 1945 年三河地震は、その発生が昭和 19 年から 20 年という第 2 次世界大戦末期であったため、フィルム不足と戦時報道管制のために被災写真がほとんど残っていない。これらの地震に関しては現在残されている写真だけからでは災害の全貌を知ることは不可能である。そこで、我々はインタビュー調査で得られた被災体験を、文章だけではなく災害のシーンを絵で再現することを考えた。

絵画作成にあたっては、各インタビューにおいて、インタビュー対象者の記憶がはっきりしていて、印象深い事柄で、かつ後世への教訓として適切だと思われる被害のようす、災害時の対応行動・生活再建のようす、支援のようすについて 5〜7 点程度を選び出して絵にした。特に絵の題材を選ぶ際には、一人の人間にスポットライトをあて、その被災から復興までを追えるように配慮した。実際の作画は、愛知県立芸術大学美術学部日本画専攻で非常勤講師をされている阪野智啓氏と藤田哲也氏の二名の若手画家に協力していただいている。二人は院展入選経験もある新進気鋭の若手画家であるが、創作活動のみならず、郷土史や災害、そして人間の行動にも非常に深い興味を持っている。時代考証などを踏まえた絵の作成のためには、まさに余人にかえがたい存在である。

作画にあたっては、画家の方にも必ずインタビューに参加してもらい、直接、被災者の話を聞きながらラフスケッチを書いてもらう。生の声を聞き、被災者の人となりを感じることによって被災体験のイメージを共有するためである。インタビュー終了後には、インタビュー対象者のいないところでインタビュー全体の内容・感想について話しあい、ラフスケッチなどを見ながら、絵にすべき知見・教訓について話しあい、最終的に 5〜7 点を選定する。その後、画家の方には時代考証のための資料（例えば、毎日新聞社編, 1977）と、地震被害の様子がわかる資料（例えば、朝日新聞社, 1995; 第三書館編集部編, 1997）を参考にしながら、実際に絵画を作成してもらっている。最後に、そのようにして作成した絵画は必ず調査対象者自身に見てもらい、記憶していることと絵との差異について指摘をもらった。修正の必要が生じた場合は持ち帰って修正し、「修正が意に叶ったものである」と調査対象者が納得するまで修正を重ねていった。

これまでのインタビュー形式の災害調査では、その結果を文字で残していくことに主眼がおかれていた。しかし文字による記述は正確な描写が可能である反面、一般の人には近づきがたいものであり、また別々にインタビューして得られた結果を時空間的な枠組みで比較再検討することが難しいという問題点が存在していた。本研究により、文字では伝えにくい知見・教訓が絵画によってわかりやすく視覚化できることで、60 年前の被災地における絵の展示会や講演会などが実現した。また今世紀前半にプレート型巨大地震の発生が予想されていることを鑑みると、その時に社会の中核となるであろう小中学生に対しても、絵にすることでわかりやすく知見・教訓を伝えることができることもこの手法の大きな特長である。